

医療評価
総合討議

座長： 関本先生のご研究で、「水と同じだと思っても使う」、これは非常に日本的と言いますか、なかなか世界では理解されないかなと思いました。私は7～8年前から、『Gastric Cancer』という学会誌の編集に関わっていますが、この会誌は編集スタッフが欧米、日本半々という構成になっています。論文の採択で常にもめたのは、日本のレフリーが通した論文が、欧米のレフリーから論理性に欠けるという指摘を受ける点です。

この論理性の問題は、わが国の医学・医療の国際化が進む際、最初に克服しなければならないバリアであると考えます。

このセッションでご発表頂いた4人の方の演題も、野口先生の日米の医学生 of 診断能力、それから、安藤先生のカナダのシステムをどういうふうに日本に導き入れるか、小林先生の、医療事故の大国であり、ネガティブな意味を含めて先駆的なアメリカのシステムをどのように日本に持ってくるか、そして、今の関本先生のお話のように、それぞれが将来の国際化に向けて超えなければいけないバリアの、色々な問題を浮き彫りにされていたと思います。

このファイザーヘルスリサーチ振興財団の研究助成金には、ここで発表して終わりということではなく、研究の進展に従って、新しい結果を加えて報告していただくという特徴があります。ここでご発表になった4名の方々も是非、新しいデータを加えて、将来また発表をして頂きたいと思います。